【研究論文】

親子ウオッチングの観察記録に付したコメントと観察場所の分析を通して － 保育者養成の教育課程における新たな目標

伊　藤　博　美

要　旨　本研究は、学生による親子ウオッチングの観察記録およびコメントを、親子どちらに着眼し、またどのような視点・態度から書かれたものか分析し、観察場所を分類した結果から、子どもに対して道徳的評価の視点をもつこと、親に対しては認知的・共感的態度をもつことが保育者養成課程における新たな教育目標として設定される必要のあることを示し、その達成には親子と交流する機会を設定することが必要であると提案するものである。

1．はじめに

(1) 本研究の分析対象について

「親子ウオッチング」は、『現代保育学入門』*1「第１章　子どもと出会うということ」において、「子どもや子育て中の親を少しでも知りたいと思ったときに、誰でも手軽に試みることができる」*2、いわば街の中などで見かける親子の姿の観察記録である。この親子ウオッチングの注意点は、日常の親子の姿を観察することが目的であるために、観察対象となっている親子にそれを気取られてはならないことである。バードウオッチング同様、相手に悟られないよう用心しなければならないと諏訪は書いている*3。

諏訪は同書において、親子ウオッチングの観察記録からどのような研究成果が導き出されたかをも明らかにしている。同書において紹介されている研究成果として、第一に、スーパー・マーケットのレジで見かける「表情の乏しい子どもたち」について、なぜ表情が乏しいのか原因や理由を考察している鈴木明子の卒業論文の研究があげられている。第二に、早期教育の状況を把握するために、学習塾において同じ親子を続けて観察した萩原順子の研究が取りあげられている。萩原は、母親の子どもに対する態度を観察記録から「子ども支配型」・「子ども追随型」・「子ども誘導型」に分けている。こうした親の養育態度に関する研究が、子どもの性向の成長と関連づけられて、「いまなお関心を呼ぶ」ものだと諏訪は紹介している。

子どもや子育て中の親を知るのに手軽で有効な手段として親子ウオッチングは紹介され、その観察記録に基づいた研究成果も明らかにされている。その有効性は諏訪が挙げた研究によって立証されていると言えるだろう。そこで、著者が担当している「保育原理」の受講生に対して、親子ウオッチングを行い観察記録を提示することを課題とした。

親子ウオッチングを課題とした対象は、著者が岡崎女子短期大学にて担当した授業科目「保育原理」の受講生、すなわち2001年度の幼児教育学科１年CDEGクラスおよび2002年度幼児教育科１年KLEGクラスの約320名の学生である。学生が親子ウオッチングを行った期間は、主にそれぞれの年度の４月から７月の間であり、事例報告集としてまとめた印刷物をクラスごとに配布したのは９月である。

学生に求めた課題の手順は以下のとおりである。グループに分かれた学生のうち、授業ごとに担当者が順番で観察記録とコメントを発表し、それに対してグループでディスカッションを行い、そのディスカッションのまとめを記録したものを著者に提出した。７月後半の授業（前期最後の授業）にて全ての観察記録の中から、特に印象に残ったものに対して、各グループで「お父さんそれはないで賞」など独自の賞を設け、対象者を選び、表彰状を書き、表彰式を行った。その際、各グループに観察記録に対する総評を付けてもらい、それを含めて、「親子ウォッ

チング事例報告集」として後期に印刷したものを配布した。

したがって、本研究において分析の対象としたのは、2001年度および2002年度に著者が担当した「保育原理」の受講生が提出した観察記録・コメント*4、表彰、総評を載せた「親子ウォッチング事例報告集」に掲載されている観察記録に付した学生によるコメントである。

諏訪が前掲書のなかで紹介した以外にも、親子ウオッチングの観察記録から様々な研究成果が挙げられていることは推測に難くない。しかし、本研究では視点を少し変えて、子どもについて学ぼうとしている保育者養成の課程に入学したばかりの短期大学の学生が、どのような視点から親子の姿を観察し、その姿にどのようなコメントをつけるのかに着眼してみた。

なお、分類の「親」は、父母だけでなく祖父母、保育所や幼稚園の先生、おば等、子どもと一緒にいる大人を意味する。これは、街角で偶然観察する対象となった親子にその関係を問うて確認することができなかったことをのみ理由とするのではない。これ以外の理由としては、学生にとっては、子どもとその「親」と限定しない方が、観察の機会が増えると考えたからである。

とはいえ、親以外の「大人」が観察事例のうちどの程度登場したかを明らかにしておくことは必要である。「親」のうち、親以外の大人が登場する観察事例は、店員が38、祖母が12、学生本人である「私」が12、保育所や幼稚園の先生が6、祖父が4、おばが1、その他通りすがりの全く知らない人が2見られた（注に表を掲載）*5。したがって、親以外の大人として登場する観察事例の約半分は、親子が買い物をしているときにかかわった店員が登場したものである。

また、この店員の中にはアルバイトとして働いていた観察者である学生本人も含まれていることも留意する必要がある。このことから、本研究における「親子ウオッチング」は、諏訪の推奨したものより「親」の範囲を広く捉えていることになるけれども、主として親子の観察記録であることには変わりなく、したがってその記録に付した観察者のコメントも、主として親子に対するものとして分類した。

2．本研究の目的・分析方法

上述したように、本研究の分析対象は著者が担当している「保育原理」を受講した学生が集めてきた観察記録に対して、観察した学生本人が付したコメントである。

(1) 目　的

本研究の目的は、保育のみならず保護者等に対する子育て支援も職務の範囲として含まれるようになってきた保育者の養成課程における新たな課題を提示することにある。「エンゼルプラン」などの子育て支援施策のもとで、保育者の職務は子どもだけを対象としたものではなく、保育者の勤務する園に通園する子どもの親およびそれ以外の地域の子育て中の親をも対象とするようになってきている。そのような状況にあって、保育者が、子どもだけでなく親を理解し、共感することは職務の達成において必要な条件だと思われる。このことは、保育者養成の教育課程において、子どもだけでなく親を理解し共感する視点や態度の育成という新たな目標を生みだすものと思われる。

特に著者の担当している「保育原理」という授業科目が保育者養成の課程において基礎的な科目であることを踏まえれば、子どものみならず親に対して、学生がどの程度情報を持って理解し、かつ両者に対して共感的な態度を有しているかを把握する必要がある。その上で授業担当者には授業における教育目標やそれに基づいた課題設定が求められる。

したがって、本研究は、新たな役割を担いつつある保育者養成の教育課程において求められる教育目標やそれに基づいた課題設定をすることを目的とする。

(2) 本研究の課題

そのためには、まず保育者志望学生の親および子どもに対する視点・態度の現状把握が第一の課題となる。本研究においては、保育者養成課程である幼児教育学科において必修科目である「保育原理」の受講生が、短期大学に入学して最初の学期の間に収集した親子ウォッチングの観察記録に対して、収集者自身がつけたコメントを、ある視点やある態度といった側面から分析することが課題となる。

また、受講生が事例を収集した場所を分類するこ

とが第二の課題となる。これは、保育者の養成課程において学生が子どもや親子の関係をうかがい知ることのできる場所を明らかにすることにつながるためである。

(3) 分析・分類の方法

①コメントの分析

第一に、学生のコメントが、誰に対してどのような態度をもった視点から書かれたのか、という点から分析する。

『幼児教育へのいざない』*6「第１章　子どもを見るということ」において、著者の佐伯胖は、母親の子どもへの発話を「子ども視点型の代弁」・「母子視点型の代弁」・「あいまい型の代弁」・「移行型の代弁」と四つに分類した岡本依子の研究*7に依拠している。佐伯は、岡本が挙げたこの四つのタイプを、保育者の子どもへの「寄り添い方」として見なすことが可能としている。この四つに加えて、佐伯は「子ども視点型」のなかでもとくに期待している行為を促すものを「子ども視点誘導型」という第五のタイプとして分類している。

これら五つのタイプのうち、「子ども視点型」と「子ども視点誘導型」の保育者の「寄り添い方」について、佐伯は問題を提示している。少し長いが引用する。これら二つのタイプは、「「あなたにこうしてほしい。こうであってほしい」というメッセージを、あたかも本人（子ども）がやっていることのような、本人（子ども）が自発的に言っているような雰囲気にして、相手に伝えているのである。言い方は悪いが、相手（子ども）が、自分で言っている、自分でやっているような「錯覚」をねらっているのだ、と言えなくもない。（改段落：引用者注）実際、「いたくない、いたくない……」は、相手を「催眠術にかけている」ような言い方だととれないことはない。あるいは「移行型」についても、非常に意地の悪い言い方をすれば、刑事が取調室で「犯人」に「わたしが殺しました、って、（言え）」というケースと相通じていると言えよう」*8。佐伯は、「子ども視点型」と「子ども視点誘導型」のいずれの寄り添い方も、保育者にとって望ましい子どもが前提され、そうした子ども像が子どもに押しつけられてしまっていることを問題視しているといえよう。

本研究ではこの佐伯の五つのタイプをそのまま用いずに、子どもと親どちらに対して目が向けられ、またそのどちらかに関する新しい情報を得たり再確認したりするか、どちらかに対してその気持ちを代弁する共感を示すか、あるいはプラスかマイナスに評価づけをして、書かれたものかという八つのタイプに、学生の付けたコメントを分けることとする。

これは本研究の目的が、保育者養成の教育課程における課題を見出すことにあるためである。保育者志望の学生が子どものみならず親のことを理解し共感することは、今後の保育・幼児教育の前提条件となると思われる。子どもに対する理解・共感はもちろんのこと、親に対しても同様の視点や態度を持てなければ、子育て支援を含めたこれからの保育者の任務に応えられないであろう。

本研究では、八つのタイプを以下のように定義づけることとする。まず、子どもに着眼するケースを以下のように四つに分ける。a.）子・認知型－子どもって、そういうもんなんだ、やっぱりそうだったんだとわかるケース*9、b.）子・共感型－子どもに共感し、その気持ちを代弁しているケース*10、c.）子・プラス評価型－子どもを称賛する、プラスに評価する、いい子どもと判断するケース*11、d.）子・マイナス評価型－子どもを批判する、マイナスに評価する、悪い子どもと判断するケース*12。

他方、親に着眼するケースについては、以下のように四つに分ける。e.）親・認知型－親って、そういうもんなんだ　、やっぱりそうだったんだとわかるケース*13、f.）親・共感型－親に共感し、その気持ちを代弁しているケース*14、g.）親・プラス評価型－親を称賛する、プラスに評価する、いい親と判断するケース*15、h.）親・マイナス評価型－親を批判する、マイナスに評価する、悪い親と判断するケース*16。

観察者である学生が付けた観察事例へのコメントはすべて上述の八つのタイプに分類する。しかし、一つのコメントが一つのタイプにだけ適合するわけではなく、一つのコメントが二つのタイプに当てはまる場合や、どのタイプにもあてはまらないものがわずかながらあることは想像に難くない。また、ここには分類する著者の解釈が入ることは否めない。しかし、学生がどのような視点から親子を観察したのかをまず理解することが第一の課題となるので、本研究ではこの八つのタイプを設定する。

②場所の分類

第二に、学生が親子を観察した場所を分類する。諏訪は前掲書において、親子ウオッチングを推奨する理由として、「保育士や教師を志す学生さんであっても、自宅の近所で子どもたちと遊んでみることは至難のわざ」*17であることをあげている。多産少死時代のきょうだいとは異なり、きょうだいの数は2，3人が平均的である*18現代において、学生が幼いきょうだい（子ども）の面倒をみる機会はなく、またさらに少子化傾向において、子どもが地域においてもあまり見られない環境では、親族だけでなく他人の子どもに接触する機会も少ないと考えられる。そのような状況にあって、子どもや親のことをよく知るためには、偶然とはいえ街中などで出会う親子を観察することが第一歩だと諏訪は考えていると言えるだろう。

しかし、偶然に親子に出会うことは、学生にとって期待できるほど機会が多いかどうか疑問である。丹羽洋子*19によれば、乳児を連れた外出はベビー休憩室のあるデパートやスーパーが多い(1996年の調査)。また、丹羽が参照している株式会社タカラの調査*20によると、子どものころふだんよく遊んだ場所としてあげられるのは、自分や友だちの家が最も多い（1991年発表)。ただし、これらのデータは、子どもが幼児である親が、親子連れで出かける先を中心に調べたものではない。前者のデータはまだ自分で移動が不可能な乳児の子どもを連れた親の外出先であり、後者のデータは自分で移動が可能な、学齢以降の子どもが自分で外出した先であると考えられる。したがって、学生が集めた親子ウオッチングの観察記録から観察した場所を分類することは、幼児と親とが連れだって外出する先を明らかにする手がかりとなる。

さらに、幼い子どもを連れた親の外出する時間・場所と、大学やアルバイトなどに時間を費やしている学生が街の中にいる時間・場所がマッチングしなければ、親子ウオッチングは不可能である。学生が親子を観察する場所を分類すれば、逆に親子ウオッチングが容易に可能な場所を知ることができ、今後の親子ウオッチングにも有益であると思われる。また、これは逆に親子が日頃どういう場所に出かけているかを、学生の視点から垣間見ることにもつながる。すなわち、幼い子どもを連れた親にとって、出かけなければならない、あるいは出かけやすい場所が、学生の生活空間と重なって、どこに存在するのか、また多くあるのかどうかを知ることにもつながると思われる。

場所の分類は、以下のとおりである。大規模小売店（スーパー・マーケット、百貨店等）や特定の小売店（和・洋菓子屋、洋服屋)、コンビニエンス・ストア等はひとまとめに「小売店」、ファミリー・レストラン、喫茶店等の「飲食店」、他に、「公園・広場」、「駅・電車・バス停・バス」、「保育所・幼稚園」、「遊園地・動物園・ゲームセンター・ボーリング場」、「自宅等の家」、コンサート等の会場として「ホール」、「病院」、地域の「祭り」、親などが運転する「車の中」の11項目に加え、数の少ないもの（原則的に1）は「その他」と分類する。

3．結　果

(1) 学生の付したコメントの視点・態度の分析

親子ウオッチングの観察記録の総数393を、上述のように親と子それぞれの認知型、共感型、プラス評価型、マイナス評価型に分析した結果、「子・認知型」が141と最も多く、次に「子・共感型」が100、三番目に「親・マイナス評価型」が97、四番目に「親プラス評価型」69という順に多いことが明らかになった。

すなわち、学生は観察した事例に対して、子どもに関して新しい情報を得たか、あるいは既に持っていた情報を確認したコメントを最も多く書き、子どもの気持ちに共感したコメントを二番目に多く書いている。三番目として、悪い親である、ダメな親であると親を否定的に評価するもの、四番目には逆によい親であると肯定的に評価するコメントが多く書かれていた。親子どちらに着眼したかを大別すると、子の側に着眼したコメントが272、親の側に着眼したコメントが226と、やや子の側に着眼したコメントが多かった。結果は次頁の表1のように分けられる。

なお、一つのコメントが一つのタイプに当てはまるものだけでなく、複数のタイプに分類されるものもあり、またコメントのない観察記録もあったために、分類したものの総数は393とは一致しない。

表1　視点・態度の分析

視点の型	2001年度	2002年度	合　計
子・認知型	24	117	141
子・共感型	31	69	100
子・プラス評価型	5	22	27
子・マイナス評価型	3	1	4
子型総数	63	209	272
親・認知型	15	23	38
親・共感型	9	13	22
親・プラス評価型	27	42	69
親・マイナス評価型	60	37	97
親型総数	111	115	226

(2) 観察場所の分類

観察場所が明記されていた観察記録は376であった。そのうち、スーパー・マーケットやコンビニエンス・ストア、百貨店、洋菓子など専門店を含めた「小売店」が最も多く、半数近くにあたる171にのぼる。次に「駅・電車・バス停・バス」が58、三番目に「飲食店」が57とこの二項目で30%強を占め、以下10%に満たないけれども四番目の「公園・広場」が19、次いで「家」、「遊園地・動物園・ゲームセンター・ボーリング場」、「保育所・幼稚園」、「道」、「病院」と続いている。

表2　観察場所の分類

場所	2001年度	2002年度	合計(割合)*
小売店	69	102	171 (45.5%)
駅・電車・バス停・バス	24	34	58 (15.4%)
飲食店	18	39	57 (15.1%)
公園・広場	7	12	19 (5.1%)
家	9	9	18 (4.8%)
遊園地・動物園・ゲームセンター・ボーリング場	6	7	13 (3.5%)
保育所・幼稚園	1	10	11 (2.9%)
道	1	9	10 (2.7%)
病院	5	1	6 (1.6%)
ホール	1	1	2 (0.5%)
祭り	0	2	2 (0.5%)
車の中	0	2	2 (0.5%)
その他	5	2	7 (1.9%)
総数	145	230	376

＊割合は、小数点第二位四捨五入

4．考　察

(1) コメントの視点・態度の分析から

コメントは、子に着眼したものが親に着眼したものよりやや多く見られた。このことは、学生がどちらかといえば親よりも子どもに目を向けがちであることを意味するだろう。保育者志望の学生の多くは、入学前から子どもが好きである傾向が多いと推察されるため、子どもに着眼するコメントが多い結果は自然なことであるかもしれない。

しかし、好きだからといって子どもをもとから「いい子」という前提の下に見ているわけではない。子どもを「いい子」と評価したコメントは27しか見られない。また「悪い子」と評価したコメントに至ってはわずか4に留まる。すなわち、子どもに対して、学生は、理解に努め共感しようとする姿勢が多く見られるものの、子どもをいい子・悪い子と評価づけようとはしない結果が現れていることを意味する。

このことは、保育者になって以後も、まず子どもを評価するのではなく、子どものことを理解し、共感しようとする姿勢・態度として維持されていくものと推測される。こうした態度は、保育者を志望する学生にとっては必要不可欠な条件であるけれども、入学の前後にすでにそういった態度を有していることから、この態度の育成のために、改めてさらなる課題を提示すべく目標として設定する必要はないものと思われる。

しかし、子どもを評価する視点や態度が見られないことは、評価の一部が道徳性にかかわるものであることを踏まえ、また道徳性の育成も保育者の任務であることを鑑みれば、やや問題があるように思われる。子どもであってもしてはいけないことをすれば「悪い子」と評価する、あるいは道徳的に善いことをしたら「よい子」だと肯定的に評価することは、前慣習的な道徳性発達段階[*21]にいる幼児とかかわる保育者には必要な態度とはいえないだろうか。ここから、子どもに対する第二の視点として評価的な視点が求められ、保育者養成の教育課程において子どもに対する評価的な視点の育成が新しい目標となることが明らかとなったといえよう。

一方、コメントを分類した結果、親に関しては親・プラス型あるいはマイナス型が多いことから、学生の多くは親を「いい親」あるいは「悪い親」と見る傾向にあると言えるだろう。評価を下す際には、

その親に関する理解が求められるが、親・認知型は多くなく、親に共感する態度はさらに少ない。

地域の子育て支援を担う保育所において、「いい親」あるいは「悪い親」と親を評価するだけでは、子育てを支援することにはつながらないだろう。子育て支援において求められるのは、まず親に対する理解と共感的な態度ではないだろうか。子育て支援を担う保育所だけでなく幼稚園も含めて、保育者が親と共に子どもを育てていくには、子どもの理解や共感的視点および親を評価する視点・態度のほかに、親の理解や共感的視点が求められるだろう。

上述のように保育者には親の理解や共感的な視点が求められることから、保育者養成の教育課程においては、親を理解し、共感する視点や態度の育成が二つ目の新しい目標であることが明らかとなったといえよう。

(2) 観察場所の分類から

学生の半数近くが、親子をスーパー・マーケットやコンビニエンス・ストア、百貨店、和洋菓子などの専門小売店で観察している。このなかには学生自身がその店でアルバイトをしているものも含まれる。次いで多いのが駅・電車・バス停・バスなど公共交通機関での観察事例、ほぼ同数でファミリー・レストランや喫茶店などの飲食店となっている。観察記録の75%がこれら三つの項目によって占められている。

公園や広場などは、学生がいる時間帯と親子のいる時間帯が合わないのか、観察記録が少ない。病院やホール、遊園地や動物園等は、日常的に出かける場所ではないために、観察記録が少なくなったと推測される。道や家で親子に出会うことも非常に少なく、親子について知ろうと出かけるならば、幼児を連れた親にとって、快適であろうとなかろうと日常生活を営む上では行かざるをえない場所である小売店、特に人の出入りが激しいスーパー・マーケットやコンビニエンス・ストアに行くことが第一に推奨されることになろう。

しかし、小売店で出会う親子の観察は親子の様子の一側面の観察に過ぎず、多面的に親子を理解するためには、他の場所に出かけて観察することが必要である。保育者志望の学生にとって、地域の親子の様子を観察することは、子どもの理解だけでなく親の理解、その上での共感的な態度の育成にも有益だと考えられる。とはいえ学生生活を送る以上、日中、公園や広場などで親子を観察することは容易なことではないだろう。

こういった点を踏まえれば、定期的に地域の親子と交流する機会を提供することも検討に価するかもしれない。これは幼稚園や保育所での実習が、子どもとのかかわりが中心であって、親とのかかわりがあまり持てないことや、親子のかかわっている場面に出会う機会が多くないことから、上述したような視点や態度の育成が困難と思われるためである。

5．結　論

以上、親子ウオッチングにおいて観察した記録に付した観察者である学生のコメントの分析、観察した場所の分類から、保育者養成の教育課程における新たな教育目標を提示し、その目標達成のための環境整備についての提案も試みた。

すなわち、保育者養成の教育課程における新たな教育目標としては、子どもに対して評価的な視点をもつこと、親に対して理解し共感的な態度をもつことがあげられ、こうした目標に到達するための環境整備として、地域の親子と出会い、かかわれるような機会を学生に提供することが一つの提案として示される。

6．おわりに

上述のような結論を導出するには、現在の保育者養成の教育課程の検討が不可欠であるけれども、本研究では保育者養成の教育課程に入学した最初の学期における学生の視点や態度を把握し、その上での目標設定を試みた。現在の教育課程の分析については今後の課題としたい。

【注】

＊1 諏訪きぬ編著　『現代保育学入門』　フレーベル館　2001年。

＊2『現代保育学入門』　p.14。

＊3 同上。

＊4 平成13年度岡崎女子短期大学幼児教育学科１年CDクラス、同Eクラス、同Gクラス、平成14年度岡崎女子短期大学幼児教育学科KLクラス、同Eクラス、同Gクラスのそれぞれの「親子ウオッチング事例報告集」の計６冊子。親子ウオ

ッチングの実践に取り組んでくれた、以上のクラスの方々に感謝したい。

＊5

表3 「親」のうち、親以外の大人の登場する観察事例数

大人	2001年度	2002年度	合　計
店員＊1	5	33	38
祖母	6	6	12
「私」＊2	3	9	12
先生＊3	0	6	6
祖父	1	3	4
おば	0	1	1
その他＊4	1	1	2

＊1：学生本人が自らを「店員」と記録したものを含む。
＊2：観察した学生本人のこと。
＊3：保育所や幼稚園の「先生」。
＊4：通りすがりの人。全く知らない人。

＊6 佐伯胖　『幼児教育へのいざない』　東京大学出版会　2001年。

＊7 岡本依子「母親と子どものやりとり」、やまだようこ他編『カタログ　現場心理学――表現の冒険』　金子書房、2001年所収。

＊8『幼児教育へのいざない』　pp.36-37。

＊9 一例として、「子どもは自分の思い通りにならないと”泣く”。自分の小さい頃あんな事をしていたなぁと思った。」（Sさん）があげられる。

＊10一例として、「シャボン玉セットを離そうとしないところから、店員に採られてしまうんじゃないかという警戒心があるように感じられた。ありがとうと言わずに頭を下げるのは、てれているのかなと思った。」（Mさん）があげられる。

＊11一例として、「妹の分もちゃんともらってあげることが出来るのがすごいと思った。優しいお姉ちゃんだなと思った。」（Hさん）があげられる。

＊12一例として、「もっと、お姉ちゃんらしくなった方がいい。」（Yさん）があげられる。

＊13一例として、「お母さんは大変だと思った。他人の子どもと自分の子どもとどっちを優先するのかはすごいむずかしいと思う。」（Sさん）があげられる。

＊14一例として、「最近は父と子の会話がだんだん減ってきているのに、とてもユニークな父と子の会話だった。嫌な食べ物をどうにかして食べてもらいたくてお父さんがすごく頑張っている。」（Yさん）があげられる。

＊15一例として、「この父親は男らしいほめ方をしているなぁと思った。初めから一人でやらせるんじゃなくて父親と息子が協力し、後はおまえに任せたみたいに、息子にやる気を持たせ方がうまいなと思った。これを見ていてとても感動した。言葉の少ないコミュニケーションだったけど、言葉以上に気持ちで伝わることがあるんだとわかった。」（Hさん）があげられる。

＊16一例として、「子どもはじっとしていられないから、じっと座っていろと言うのは無理だけど、せめて親がついていて、「走り回っちゃダメだよ。」とか注意して、他の人のことも考えてほしい。そして何よりも母親が全く子どもの事を気にしていなくて、それが信じられない。母親が気を使うはずなのに、全く無関心で、父親にまかせきりで、親が何も注意しなければ、子どもは走り回ったり、騒ぎすぎたりしてはダメということが分からないまま、大人になってしまう。やっぱりしつけはきちんとするべきだと思った。」（Hさん）があげられる。

＊17『現代保育学入門』　p.14。

＊18国立社会保障・人口問題研究所「第十一回出生動向基本調査」によれば、結婚十年未満の夫婦が実際に生む予定の子ども数は２人が64.3%、３人が21.8%。

＊19丹羽洋子　『今どき子育て事情――2000人の母親インタビューから』　ミネルヴァ書房　1999年。

＊20株式会社タカラ　「３世代少女文化調査」1991年。出所は『厚生白書平成５年版』。『今どき子育て事情』　p.15。

＊21前慣習的・慣習的・脱慣習的道徳性発達段階については、次のL. コールバーグの道徳性発達段階論を参照。L. コールバーグ　「「である」から「べきである」へ」　永野重史編　『道徳性の発達と教育』　新曜社　1985年所収。